

短編集 2
ゆうびん

久野那美

内容

ゆうびん	3
手紙	19
アンコール	26
さよなら	34
靴 2000	41
焚き火	48

ゆうびん

登場するもの：男

女

チリン。どこからか風鈴の音。
ふりかえると、大きな赤い自転車を押して、女が一人。
坂道を上ってきていた。

女 こんにちは。

男 こんにちは……暑かったですね。

女 ええ。でも、だいぶ。

男 風が出てきましたからね。

女 ええ。

自転車を押しながら並んで坂道を上っていく

男 めずらしいですね。赤い自転車……。

女 ゆうびん屋なんです。

男 ゆうびん屋。そうですね。

女 ゆうびん屋に見えませんか？

男 いや……そんなことありませんよ。

女 ……やっぱりね。荷物がないとね……。

男 荷物？

女 この袋。朝はゆうびんでいっぱいなんですけど。

毎朝。ポストの中からどっさり出してきて。この袋にいっぱい詰めて。

ひとつひとつ、宛名のところへ届けに行くんです。

大変なお仕事ですよね。

女 ええ。

男 今日はもう？

女 ……ええ……。

男 袋の中は空ですか。

女 ……いえ……。

男 ああ、まだ、これからどこかへ届けに行くんですか？

女 ……はい。

男 大変ですね。

女 はい。

間

女 ……ひとつだけ残るんです。
男 は？
女 どうしても、届けることのできないゆうびんがひとつだけ、残るんです。
男 ……どうして、どうしても届けることができないんですか？
女 宛先が書いてないからです。
男 なるほど。あれだけたくさんゆうびんを運んでいけばそういうこともあるんでしょね。差出人は誰なんです？
女 差出人も。
男 差出人の名前もないんですか。
女 ええ。
男 よっぽどあわててたんですね。
女 ……そうでしょうか？
男 だって…。

(チリン、自転車のベルを鳴らす)

女 一日の仕事が終わってうちへ帰るとき。このゆうびんだけが鞆の中に残ります。いつも。
男 ……そういうゆうびんも、持って歩くんですか？
女 ポストに入れられたものは、全部、届けることになっています。
男 届けると言っても…
女 ゆうびんを届けるのが私の仕事です。
男 ですけど…。どこへ？
女 わかりませんよ。だからずっと持って歩いているんです。
男 ずっと？
女 ええ。ずっと。

間

男 いつから、持って歩いているんです？

女 ずうっと昔。
男 いつ？
女 さあ。もう、覚えてません。
（男、しばらく考え込んでいる。）

チリン。音が鳴る。

女 どうしたんですか？
男 いえ。
女 そうですか。
男 いや。その。（思い切って）
・・・それは・・・、私のところへ来るはずだったゆうびんなんじゃないか
と思うんです。
女 そうなんですか。
男 もしかしたら・・・。

間

男 来るはずだったゆうびんを待っていたことがあります。
女 ずいぶん昔のことです。
男 待ってたんですか。
女 だけど・・・届かなかった。
男 届かなかった。
女 だから、私は・・・
男 ？
女 でも、ほんとうはちゃんとポストに入れられていたのに、何か事情があって届かなかったのかもしれない。そういうことも・・・あったのかもしれない。だもしたら・・・。
女 だとしたら？
男 私は・・・（考え込んでいる）
女 でも、そのゆうびんは届かなかった。
男 え？
女 届かなかったんですか？
男 いや・・・

間

男 どうしたんですか？

女 (黙ってしまった。そして、なぜか困っている……)

男 どうしたんですか？

女 あなたも。

男 え？

女 この話をすると、聞いた人はみんなあなたと同じことを言います。

男 おなじこと？

女 そう、おなじこと。でも、だけどね……。

男 私が届けられなかったゆうびんは、これ、ひとつだけなんです。

男 ……

長い間。やがて風が吹く。チリン。

男 もしかしたら……あなたは……そのゆうびんを……、正確に宛名のところへ届けてるのかもしれない。

女 もしかしたら？(憤慨している)

男 ……私はゆうびん屋です。宛先へ正確にゆうびんを届けるのが仕事です。いや……。すみません……。

チリン。

女 あなたのところへ届くはずだったゆうびんなのかもしれませんね。

男 ……。

チリン。

女 さて。道が平らになりました(自転車にまたがる)。じゃあ行きます。

男 ……あ……はい。

女 さようなら。

男 さようなら……あの……気をつけて。

女 大丈夫です。慣れてますから。

女は軽やかに自転車を漕いで行ってしまった。

短編集 2

風が吹き抜ける。チリン。風鈴の音が、遠くで鳴っているのが聞こえた。昼間はあんなに暑かったのに。夕方の風は心地いい。もうすぐ、日が暮れる。明日も暑くなりそうだ。

バス

登場するもの：女

初老の男

女 さよならを言って外へ出た。

見慣れた風景のほずなのに、何もかもが全然違って見えた。

坂道をだらだらと下る。バス停でバスを待つ。最後のバスを待った。

向かいのバス停でバスをおり、初老の男がこちらへ歩いてきた。男は女に気づいてふと笑いかけた。

女 あ…

男 こんにちは。あったかくなりましたね。

女 ……そうですね…。

男 よく、お会いしますね。

女 ……そうですね。

男 なかなか、時間通りに来ませんからね。

女 …。
男 若い人にはめんどろうでしょう。どこへ行くにもバスで15分。
女 バスに乗るの、好きですから。
男 そうですか。
女 …。
男 近くにお住まいですか？
女 いえ……。……。引越すんです。……。今日。
男 ああ。そうなんですか……。
女 ええ。
男 そうか……。……。。
女 何か？
男 残念ですね。
女 え？
男 いえ。ここであなたに会うのがちょっと楽しかった……。
女 …？
男 4年前。初めてここで出会った時から……。
女 ……。

男 ああ。いや……。すみません。
女 …4年前？
男 ええ。たしか4年前。ちょうど今頃ですよ。こんな風にあっただかい日でしたか
ら。
女 そんな前のこと……。覚えてるんですか？
男 覚えてませんか？
女 え？
男 私に道を尋ねたの……。
女 え？
男 バスを降りたあなたが向かいのバス停から歩いてきて。
困った顔で、あたりを見回して。
私をみつけると近づいてきて、小さな声で尋ねました。
「あの……。ここは何丁目なんでしょうか？」
女 あの……。
男 私が道を説明すると、あなたは大意気で、走ってその坂を上っていきました。
女 ……そう……ですか……。
男 覚えてないですか？（笑っている）

女 すみません。どうもありがとうございます。
男 …いえ。ずっとお礼をいたかったのは私の方ですから。
女 え？

男 あの時、あなたが地図を片手にバスを降りてきたとき…(照れ笑いをしている)
女 …？

男 亡くなった家内のことをふと思い出しました。
女 …？

男 会ったばかりの頃、よくバス停で待ち合わせをしたんです。

いつもなぜかきっちりバス3台遅れてやってくる彼女を、私はバス停で待っていました。

女 …
男 冬の寒い日はつらくてね…。

結婚して、もう外で待ち合わせをする必要がなくなったときは、ほっとしました。

女 (笑っている)

男 ずっと忘れてたんですよ。そんなこと。

女 …

男 もう30年も。

女 …。

男 一度だって思い出したりしなかった。一緒に暮らしている間も、いなくなっからかも。

女 …

男 一緒にいるあいだは何も思い出したりしなかったし、死んだあとは最後の時間ばかりが頭の中になりました。

女 …

男 あの日偶然あなたにここで会ってから。やっと思い出すようになりました。知り合う前のこと、会ってからのこと、結婚したばかりの頃のこと…。

女 …

男 それから。春が来るのが苦にならなくなりました。

女 亡くなられたのは…。

男 3月のはじめです。

女 …

男 ですが、はじめて会ったのもこの季節でした。

間

女 私…奥さんに似てますか？

男 いえ。あなたのほうがずっときれいですよ。

女 (笑う) どうもありがとうございます。

男 あなたがきっかけをつくってくれました。どうもありがとうございます。
女 いいえ。私も、その日……

遠くから、バスが近づいてくる。

男 ……バスが来ましたよ。

女 はい。

男 それじゃあ。気をつけて。……お元気で。

女 ありがとうございます。

男はバス停に背を向けて歩き出す。

バスが止まる。ドアが開く。女はバスに乗り込む。
舗装された広い道をバスはゆっくりと下っていく。

女 (N) バスは駅へ下る。バス停はどんどん遠くなる。

これは「行きバス」？それとも「帰りのバス」？

いろんなものがどんどん、どんどん遠くなっていった…。

初めてこのバスに乗った日があった。

「はじまりの日」が確かにあった。とてもあたたかい日だった。

でもそれを。今はどうしても思い出せない。何よりも遠くにある。

いくつ目かの春と一緒に、ふっと戻ってくるんだらうか。

そのときわたしはもう、別の「はじまりの日」の中にいるだらうか。

失くした時間は「おしまいの日」で始まって、

「はじまりの日」で終わるのかもしれない。

春風の中。バスは坂道を下っていく。

手紙

登場するもの：男

女

女 あの一とに手紙を書きたいのに、あの一との居所が分からない。だから風に乗せて、飛ばしてみることにしました。

町でいちばん高いビルから。

2月の冷たい風に乗せて。

吹き下ろす強い風が、あっという間に私の手から手紙をつれて行きました。

2月の屋上。

強い風がびゅんびゅん吹いている。

女がひとり、てすりにもたれて眼下を見ている。

男が階段を上がってくる。

男 すごい風ですね。

短編集 2

短編集 2

女 はあ・・・。

男 はあ、なるほど。ここから飛ばしたわけですね。

女 誰ですか？あなた。何の・・・

男 手紙を受け取った者です。

女 え?!?!

男 ほら。

女 ・・あ—————!!

男 なんですか？びっくりするじゃないですか。こんなところで大声を出さないでください。

ひとが来たらどうするんです。

女 だって、だって、だって、だって・・・

男 なんですか？

女 どうして？

男 何がですか？

女 あなたに届いちやっただんですか。

男 そうですよ。

女 どうして？

男 どうしてって・・・。
女 そんな・・・そんなの困ります。
男 困られても困ります。
女 どうして？
男 だってうけとってしまっただからですから。ほら。
女 ・ ・ ・ ひどい・・・返して。
男 無茶言わないでください。
女 何が無茶なんですか。ひとの手紙を横取りしたりして。
男 なにを人聞きの悪い・・・。僕のところに届いたんですから。あなたにそんなこと言われたくありません。
女 なんであなたに届くんですか？
男 だから知りません。あなたがとばしたんですよ。
女 だって・・・。

風が吹く。

男 そんなに落ち込まないでください。大丈夫ですよ。きっとなんとかなりますっ

て。
女 なんであなたに慰められないといけないんですか。しかもそんな無責任に。
男 あなたが落ちこんでるから・・・。私も全く無関係な間柄じゃないし。
女 あなたが関係するからこういうことになってるんですよ。
男 そんなこと言われても・・・。
女 返して下さい。
男 嫌です。
女 どうして？
男 僕に届いたんですから、僕のもんです。
女 ・ ・ ・ あなたが持っても仕方がないでしょ。
男 何故？
女 あなたに宛てた手紙じゃないもの。
男 どこへ届けたかったんです？
女 ・ ・ ・ わからないからとばしたのよ。
男 誰に宛てた手紙なんです？
女 あなたに関係ないでしょう。
男 そんなことわかりませんよ。

女 え？
男 でもね。僕のところが届いたんです。
女 ひっこいわね。
男 あなたのほうこそ。

間

女 ……あなた…もしかして…待ってるの？
男 ……
女 来るはずの手紙があるの？
男 ……
女 そうなのね。
男 ……
女 誰から？
男 ……
女 いつから待ってるの？
男 あなたに関係ないでしょう。

女 そんなことわからないでしょ。
男 え？
女 だって…
男 あなたは？
女 え？
男 いつから書いてるんです？
女 ……
男 どうして宛先がわからないんです？

強い風が吹く…
男の手の中の手紙が風にとばされていく…

男・女 あ…。あー

ふたり、風に運ばれていく手紙を見ている…
しばらく。

男 よかったじゃないですか。

女
男 届くといいですね。
女 どこへ？
男 どこって

風に運ばれて、手紙が宙を舞っている。

女 あれからずうっと。わたしはあのひとに手紙を書いている。
毎日、毎日、書いている。
あのひとに届くまで。
私は手紙を書きつづける
. . . . 今日も誰かに届いてしまった。

男 今日もまた手紙が届いた。
これはどこから来たんだろう。
中には何が、書いてあったんだろう。

アンコール

登場するもの：男

女

女 出棺の日。

空は遠くまで晴れていて
白い雲が次から次へと音もなく横切っていった。
世界からは音がすっかり消えていた。
ボリュームの壊れてしまったテレビみたいに。

ほんとうはたくさんのおばが交されていたはずなのに、
故障してるからなにもきこえなかった。
台詞が全くなりこえないまま、
やがてエンディングの音楽だけが、静かに流れてきた。
幕もおりなかったし、舞台も暗くならなかった。

賛美歌が聞こえる . . .

男 ?

女 それは、「フリーさんの作る歌はどうしていつもそんなに長いのか？」って私が聞いたらなんだけど。

男 2番どころか、4番とか5番とか普通にあったもんなあ。

女 うん。長かった。おんなじフレーズのくりかえし。

男 覚えやすかったけど。

女 うん。あれ、ぜんぶくっつけて「1番」にしちゃだめなの？って聞いたら怒ったよ。

男 : 駄目だったんだろ。うなあ。

女 うん。

間

男 どうしてだって？

女 え？

男 どうして2番があるって？

女 教えてくれなかった。

男 そうなんだよ。

女 え？

男 あのひとがそう言うときって。だいたい自分でもわからないんだよ。

女 そうなの？

男 うん。

女 そうなのか？

男 どうしたの？

女 ううん。

間

女 さっきの賛美歌。4番まであった。

男 : そうだっけ。

女 1番歌って、2番歌って、3番歌って、4番歌った。

男 : うん。

女 1番歌い終わったらまだ2番があった。2番歌ったらまだ3番があった。3番歌ったらまだ4番があった。

男 ……
女 くりかえして。くりかえしながら、くりかえしながら、でもほんとは少うしずつ、少うしずつ、すこうしずつ……、離れていった。
男 ……
間 ……

女 あの賛美歌聞かせてあげたかったなと思って。
男 ……うん…、でも、それは無理だろ。
女 ……うん。

しばらく、黙って歩いている。
ふいに、

男 ライブの終わったあとってさ、
女 さん？
男 なんて拍手すんのかな。
女 拍手…。

男 うん。
女 なんだろ…。よかったよ！っていうことじゃないの？
男 ……フーさんの終わったあとって、なんで拍手しないのかな。

間

女 静かだったよね。
男 うん。
女 誰も、何も言わないし。
男 音もたてない。
女 アンコールがないからじゃない？
男 拍手したら…アンコールあったのかな。
女 アンコール…。
男 どんな唄、歌ったんだろ。
女 ……何番まで歌ったんだろ。
男 1番で終わったんじゃないかな。最後は。

間

女 …どっちだかわからないだろうね。それじゃ。
男 …？

女 1番歌ったところで終わっちゃったのか、それだけは、最初から1番しかない唄だったのか。
男 …うん…。

駅までの道をだらだらと歩く。
空気が乾いているのに、なんだか汗ばんでくる…
気づかないうちに、梅雨はもう終わっていた。
そして、夏が来ていた。

さよなら

登場するもの：母

男

男 じいちゃんが亡くなって5年。

こんな暑い季節だった。呆けてるばあちゃんをひとり残して逝ってしまった。
じいちゃんは最後にはあちゃんの顔を見て、「さよなら。」と言って目を閉じた。
親戚の誰かが声を出して泣いた。
あわただしく人の行き交う中ばあちゃんだけは顔色もかえず静かに座っていた。
汗もかかずに、涼しい顔をして遠くを見ていた。
にっこり笑って頷いたようにさえ見えた。
そんな場所からもひとりだけはみ出してしまったばあちゃんが、とても可哀想だった。

そのばあちゃんも去年の暮れに逝った。

暑い。

セミの声が耳につく墓地。
手桶と柄杓を持った二人が墓前で掃除をしている。
水をかけたりして…やがて一段落。

母 めずらしいね。あんたが盆に帰ってくるなんて。
男 そう？

母 そうよ。仕事仕事ってほとんど帰ってこない。電話してもいつもいない。身体壊してるんじゃないか心配で…ひさしぶりに顔見て安心したわ。

男 ばあちゃん、じいちゃんに会えたかな。

母 一緒に帰って来るんじゃない？

男 もう来てるかな。

母 そのへんに来てるかも。

男 なんで盆に帰ってくるのかな。こっちは今暑いのに…。

母 死んだ人はもう暑くないんじゃない？

男 そうか。

ふたり、しばらく墓前に…。
やがて。

母 あんた、結婚しないの？

男 何、突然。

母 だってめったに会わないから、会ったときに聞いとこうと思って。

男 …しないよ。まだ。

母 そう？

男 しませんよ。まだまだ。

母 そう。どうして？

男 まだ無理だよ。全然。

母 どうして？

男 どうして…って…。この先どうなるかまだわからないのに…。無理に決まってるじゃない。今は誰ともどんな約束もできません。

母 …（黙って、何か考えている）

男 どうしたの？

母 （笑っている）

男 何？

母 面白い話、教えて上げようか。

男 何？

母 昔昔。あるところにひとりの若者がおりました。若者がいるとき、ある娘に恋をしました。

男 ……何？昔話？

母 そう。昔話。

男 ……なんで？

母 思い出したから。

男 ふうん。…それで？

母 一生懸命な若者の気持が伝わったのか、やがて娘もその若者のことを思うようになりました。若者は、その娘と結婚したいと思いました。けれども、まだ彼は若くて貧乏でした。お金も安定した仕事もない彼には、彼女に約束できることが何もありませんでした。

男 ……あーそういうことか。でも…ほら。

母 けれども（無視して続ける）ある日。若者は娘に言いました。

「私と一緒にしてもらえませんか？明日のこともはっきりしない私があなたに結婚を申し込む資格があるのかどうかわからないのですが、これから先の人生を最後まであなたと一緒に生きていきたい。私のいちばん最後の「さようなら」は、あなたに言いたいです。他の誰でもなく、あなたに。」

男 ……それでその女の子、なんて返事したの？

母 娘は考えて、そして言いました。「それは約束ですか？」

男 ……

母 「ええ。この先どんなことがあっても。それだけは約束します。」若者は答えました。

男 ……どうなったの？

母 娘は若者と結婚し、長い長い時間を一緒に過ごしました。

男 ……幸せになった？

母 幸せなときもあつたし、幸せでないときもありました。

男 じゃあその結婚…成功だったの？失敗だったの？

母 成功だと思つたときも、失敗だと思つたときもありました。

男 それじゃあ…

問

男 それでその約束は結局守られたの？……………あ…

男はふと黙り込む。
寺の鐘が鳴る。

母 (笑っている) 昔々。おじちゃんがあんたよりも若かった頃の話。
男 ……それじゃあ…。
母 うん。
男 なんぞ知ってるの？
母 おばあちゃんに昔…。
男 なんぞ…かっこよすぎるよ。おじいちゃん。
母 律儀なひとだったからね。それがおじいちゃんのいいところ。
男 ばあちゃん、信じてたのかな。
母 だから結婚したんですよ。
男 ……
母 参考になりますか？
男 うーん。
母 別にまねしなくてもいいのよ。
男 しませんよ。

間

母 帰ろうか。
男 うん。
母 来年もまたおいで。
男 うん。たぶん。

鐘の音。夕刻が近づいている…。

男 はみ出してたのは僕らの方だった。
あるときはあちゃんが聞いた「さようなら」は、50年おあずけになってた、
じいちゃんのプロポーズの言葉だ。

靴 2000

登場するもの：男

女

日の暮れかかった秋の海
人の気配はなくただ波の音だけが聞こえている
ときどきからすが鳴く。男が一人。何をすることもなく座っている

男 誰かを待っていた。誰かというのが誰なのか。どうしてそんなことになったんだか。どうしてそれがここなのか。もしかしたら気のせいかもしれないけど、もしかしたらとんでもない勘違いかもしれないけれども、何がどれくらい大切なことなのかわからないので動くわけにもいかななくて。ここで誰かを待っていた。時間はたっぷりあるけど、考えてもなにもわからなかった。

波の音

男 砂を踏む音がした。大きな段ボールを抱えた女がよろよろとよろけながらこち

短編集 2

短編集 2

らへ向かって歩いてきた…。

男は気になって見ている

女はやがて砂に足をとられて転んでしまった箱の中身が砂場に散る

女 あ…。

男 ああ。

女 (男に気づいて) すみません。

男 いえ…、大丈夫ですか？

女 ええ。

男 ここに、入れるんですか？

女 ええ。すみません。

男 女を手伝って箱の中身を拾い集める

しばらく

男 何ですか？

女 え？…靴です。

男 こんなにたくさん？
女 たくさん？
男 ……どうしたんですか？これ。
女 拾ったんです。
男 どこで？
女 ここで。
男 海で？
女 ええ。波に運ばれてきた靴。濡れてるから広げて乾かしたんです。昼間の砂はあたたかいから。
男 ……こんなにたくさん？
女 そんなにたくさんありますか？
男 種類も、形も、大きさも…。
女 種類も、形も、大きさも…。
男 あなたの靴ですか？
女 拾ったものは私のものでしょうか？
男 ……
男 どうして、拾うんです？

女 落ちてたから。
男 拾って、どうするんです？
女 集めて乾かしてみました。
男 どうして？
女 (困っている) ぬれてたから。
男 どこへ運んでいくんです？
女 ……どこって(笑っている)。
男 なんですか？
女 いえ。
男 ……

女は立ち上る

女 涼しくなりましたね。
男 え？
女 夕方は、寒いくらい。
男 ……

女 もう波の音はこれくらい大きくて。
男 ……
女 靴が砂を踏む音もちゃんと聞こえる。
男 ……どうして…。
女 散らかしたものは片づけないと。
男 ……
女 時間かかってても。ひとつずつ。
男 ……

女は箱を持ち上げる

女 もう行きます。
男 乾かさないんですか？
女 え？
男 まだ濡れてる靴もあるのに。
女 ええ。(残念そうに)。
男 どうして？

女 だってしかたないんです。
男 ?
女 もうすぐ、日が暮れるから。
男 日が暮れると何が？
女 また湿ってしまっしょ。
男 ……
女 乾いてる靴もあるのに。
男 ……
女 手伝ってくれてありがとうございます。さようなら。
男 あ。

女は振りかえる

女 じゃあ。また。
男 え？
男 たくさんの靴を抱えて彼女は行ってしまった。砂の上にまがりくねった足跡を残して。波がそれを端からひとつずつ消していく。追いかけることはできなかつた。

同じ光景を。見たことがあるような気がした。僕はここに立っていて、遠くを見ていて。彼女は靴を抱えて闇の中へ歩いていく。たくさんの靴。誰かの靴。片方だけの靴。大きさの違う靴。ひものちぎれた靴。破れた靴。汚れた靴。場違いに新しい靴。見たことのない靴。見たことのない人がはいていた、どこかで見たことのあるような気がする靴。

波音がだんだんに大きくなってきた。なんだか肌寒い。気がつく。やわらかな潮の香りは消えていた。鼻の奥を突く透明な風の匂いがした。
もうすぐ日が暮れる。僕は砂を鳴らして立ち上った。

焚き火

登場するもの：男

女

男 ふきっさらしのバス停でバスを待っていた。
前の空き地で、誰かが火を焚いていた。
大きなドラム缶から白い煙がもくもくと上がっていた。

女 どうぞ。あたってください。

男 …え？

女 バス、遅れてるみたいですよ。

男 …ああ…そうなんですか…。参ったな。

女 寒いでしょう。どうぞ。

男 すみません…。たき火ですか…。

女 ええ。いらぬものを燃やしたくて。

男 大掃除ですか？

女 ええ。仕事が変わることになったんで…。今日は大掃除。
男 ああ。そうなんですか…。
女 ええ。今日でおしまいなんです。だから…。
男 そうですか。ご苦労様でした。
女 いいえ…。さあ、どうぞ。

ふたり、黙って焚き火を見ている。
ぱちぱちぱち…。ドラム缶の中で炎がはぜる。
しばらく。

男 ……何を燃やすんですか？（何気なく）
女 ……ゆうびんです。
男 え？
女 ゆうびん屋だったんです。
男 ……ゆうびん…？
女 ……ええ。
男 ……燃やすんですか？
女 ええ。もう、持って歩くことができないので、燃やすことにしたんです。

男 え？
女 ずうっと、持って歩いてきたゆうびんがあるんですけど、もう、もって歩くことができないので。
男 ……どうして、届けなかったんですか？
女 届けることができなかったんです。
男 どうして？
女 宛先が書いてなかったんです。
男 ……宛先が？
女 ええ。
男 差出人は？
女 差出人も。
男 ……。
女 一日の仕事が終わって。うちへ帰るとき、いつもそのゆうびんだけが鞆の中に残りました。
届けることができなかったんです。最後まで…。

間

男 いつから、持って歩いてたんですか？
女 いつから…。ずうっと昔です。
男 ずうっと、昔…。

男、何か考え込んでいる。

女 どうしたんですか？
男 いえ…

男、何か考え込んでいる。しばらく。

男 それは…。私のところに届くはずだったゆうびんなのかもしれない。
女 ……
男 来るはずだったゆうびんを、待っていたことがあります。
女 ……
男 だけど。そのゆうびんは届かなかった。

女 ……
男 だから私は…。
女 ……
男 もし、届いてたら…。(男は混乱している)
女 (笑っている)

問

男 なんですか？
女 ……最後の最後まで…。
男 え？
女 ゆうびんを届けていると、いろんな人に会いました。
男 ……
女 この話をする、みんな、あなたと同じことを言いました。

問

女 ですけど…。私が届けることのできなかつたゆうびんは、その一通だけだったんですよ。
男 ……

ふたり、黙って煙を見ている。しばらく。

男 あの。
女 はい？
男 開けてみたことはないんですか？
女 え？
男 その…ゆうびん
女 ありません。
男 届けるのが仕事だから？
女 そうです。
男 でも、もう、届けることができなんでしょう。
女 ？
男 開けてみればいいのに。

女 ……え…。
男 開けてみようと思ったことないんですか？
女 ありません。
男 どうしてですか？
女 「私のところに届くはずだった郵便なのかもしれない」と言ったひとは大勢いましたけど。
男 ……。
女 中身を見せて欲しいと言った人は誰もいませんでした。
男 だけど、燃やしてしまうのなら、その前に一度開けて見たっていいじゃないですか？
女 だって、あなたはずっと、それをもって歩いていたんでしょう？あなたには、それを開ける権利があるような気がします。
女 権利…。
男 気になりませんか？だって…

女、煙を見ている。
手に持った手紙を、ふと炎の中へ放り込んだ。

男 あっ…。

ぱちぱちぱち…。手紙は端からゆっくりと焦げていく。
ふたり、呆然とそれを見ている。

男 …燃えてますよ。

女 燃やしてるんです。

男 …

女 もう、もって歩くことができないので。燃やすことにしたんです。

間

男 わからない。どうして…、開けてみなかったんですか？

女 どうして？

男 ええ。

女 あなたは開けてみたかったですか？
男 いいえ。私は。

女 ほら…

男 だけど、あなたは…

女は男に向き直り、かすかに笑っている。

女 「どうして開けてみなかったのか」？

男 …

女 ……私のところに届くはずだったゆうびんなのかもしれないからです。
男 え…。

バスの止まる音。

ドアが開き…やがて…

女 バス、来ましたよ。

男 あの…

女 バス…。

男 どうして、やめるんですか？

女 え？

男 ゆうびん屋…

女 他の仕事をするからです。
男 それは…

フツフ。クラクションの音。

女 さようなら。
男 …。

男 言葉がみつからないまま、私はバスに乗り込んだ。

バスの中は暖かかった。

後ろの窓から見える景色は、たき火の煙で白く濁っていた。

聞きそびれたことがあるような気がした。

でもそれがなんなのか、わからなかった。

短編集 2

短編集2 ゆうびん

二〇一六年一月七日初版第一刷行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com

※上演に関するお問い合わせは右記まで。